

社会老年学と高齢者政策

名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程

美濃羽 亜希子

社会老年学は高齢期の社会的な側面を研究する学際的な分野であり、社会学・社会福祉学・心理学・精神医学・看護学など、多くの学問領域と関連している。社会老年学のテーマは高齢者観、高齢期における心身の健康、就労と引退、福祉と介護、高齢期における人間関係、社会活動、生活の質（quality of life）など多岐にわたるが、一言で言えば、社会老年学は「幸福な老い」（successful aging）に大きな関心を持ってきたと言える。社会老年学の教科書にも、「幸福に老いるための条件を明らかにすることは社会老年学に課された究極の課題」であるとの記述がみられる（古谷野 2008:139）。アメリカを中心とする主流派の社会老年学においては、幸福に老いるための条件をつきとめるべく、主観的幸福感を測定するための尺度の開発と改良、さらに幸福感を規定する諸要因の分析が精力的に進められてきた。

社会老年学と政策

社会老年学は幸福な老いの実現をめざすため、実学的な志向が強く、政策との関連が深い。年金政策のような具体的な社会保障制度に大きな影響をおよぼしているわけではないが、社会老年学は高齢者の生活実態を解明することを通じて、政策にさまざまな影響をおよぼしてきた。エイジズムの研究や、高齢期における人間関係・社会参加の研究がその例としてあげられる。

社会老年学は、その研究を通じてエイジズムの存在を明らかにしてきた。エイジズムとは年齢差別のことであり、高齢者はみな身体が弱く頭脳が明敏でないなど、否定的なステレオタイプを指している。アメリカでは女性運動が盛んになった時代の流れのなかで、年齢差別反対運動も起きた。社会老年学者らもエイジズムの存在を明らかにする研究を活発に行ない、高齢者がマスメディアにおいて差別的に扱われているなどの知見が提出された（Brubaker and Powers 1976 ほか多数）。メディアにおけるエイジズムの研究は、アメリカのテレビ倫理綱領に「人種・性別とともに年齢について差別的な取り上げ方をしない」との条項の追加につながるなどの影響を与えた（古谷野 2008:25）。さらに、強制的な定年退職は年齢差別の一環であると捉えられて反対運動が起き、アメリカでは雇用における年齢差別禁止法（Age Discrimination in Employment Act）が制定された。現在では、ほとんどの民間企業で強制定年退職はなくなっている。

高齢期における人間関係・社会参加は、社会老年学のなかでも特に活発に研究されてきた分野である。人とのつながりを表わすためにソーシャル・ネットワークやソーシャル・サポート（人とのつながりから得られる手助け・情報・評価・愛情などの総称）という概念が用いられてきた。高齢期における人間関係・社会参加の研究は、高齢者が孤立することは精神的・身体的健康に悪影響をおよぼすという知見を一貫して提出してきており、高齢者が社会的に孤立しないように、生きがいを目的とした就労、生涯学習、交流を目的とした高齢者サロン事業などを行なう根拠となっている。高齢者の心身の健康をよい状態に

保つことは、高齢者自身の幸福につながるだけでなく、政府の側からみても介護ニーズの抑制や社会保障費の節約になるため、「介護予防」策として考えられている。また、わが国では昨今、自殺予防の観点からうつ対策が進められているが、そのなかでも「とりわけ高齢者の場合には、閉じこもりや社会的な孤立を予防し、気晴らしができたり自身の健康や生きがいがいづくりにつながるような「人との関係をつなぐ」場づくりが必要」という認識が示されている（厚生労働省地域におけるうつ対策検討会 2004:17）。秋田県で行なわれている自殺対策においても、うつ病の早期発見・治療という医学モデルだけでなく、地域における人のつながりを強化するコミュニティモデルが大事だと考えられている（本橋 2008）。このように、人間関係・社会参加が高齢者の心身の健康によいという知見が政策に活かされているのである。

社会老年学の今後の課題

社会老年学は「幸福な老い」の実現のために活発に研究を行ない、社会政策にも影響をおよぼしてきた。しかし、社会老年学が今後取り組むべき課題も少なくない。筆者は、これまでの社会老年学について、①高齢者を均質な集団としてとらえてきたこと、②量的・心理学的な研究に重点を置いてきたため「社会」を十分とらえきれていないこと、の2点が特に問題であると考ええる。

第一に、高齢者を均質な集団として認識した場合、高齢者のあいだに存在する重要な差異が見落とされてしまう。これまでの社会老年学の研究は、「孤立した高齢者」というネガティブな神話を打破するという目的があったこともあり、「退職者」「高齢者」などの大きなくくりでとらえ、「社会的に孤立した高齢者」など実際にはきわめてまれ（浅川 2008:107）であるという知見を積み重ねているが、高齢者間の差異に注意を払わなければ過度に楽観的なイメージを描くことになるだろう。今後は、社会経済的地位やジェンダーなどに注意を払った研究を行ない、孤独死や高齢者の貧困などの社会問題にも対応していくべきである。

第二に、従来の社会老年学は、主観的幸福感の尺度づくりに熱心だったことに代表されるように、量的・心理学的な分析に重点を置いてきた。個人の心理的な要素ももちろん重要だが、それだけに焦点を当てると、社会構造的な側面が見逃されてしまう。たとえば、社会老年学では家族からのソーシャル・サポート（たとえば「手段的サポート」と呼ばれる看病など）がポジティブに描かれるが、家族から高齢者へのサポートを賛美すべきものとしてのみ捉えれば、高齢者へのサポートを家族に押し付けることにつながり、いかに介護を社会化していくかという問題が見えなくなってしまうだろう。さらに、主観的幸福感の要因を探るおびただしい数の研究は、すでに「健康と経済状態と人間関係が、幸福に老いるために重要である」（古谷野 2008:148）という自明とも言える結論にほぼ収束してしまっている。そのため、今後は調査票調査を行なって主観的幸福感を従属変数として分析するという研究設計では新しい知を生み出せないだろうし、政策形成にもつながらないだろう。これからの社会老年学は、高齢者の個人的な属性や性格によって何かを説明しようとするだけでなく、高齢者の社会生活のあり方が社会制度によって規定されているという側面にも着目すべきである。また、量的な調査によってトレンドをつかむだけでなく、質的な調査によって問題のメカニズムを捉えたり、社会制度に着目することで高齢者の生活が

いかに社会的に規定されているかを明らかにしたりするなど、社会老年学には新しい展開が期待されている。心理面だけでなく社会的な側面にも注目し、積極的に政策提言を行なうことにより、社会老年学は「幸福な老い」の実現にいっそう重要な役割を果たしうらるう。

参考文献

- 浅川達人, 2008「高齢期の人間関係」古谷野亘・安藤孝敏編『改訂・新社会老年学——シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング, 107-138.
- Brubaker, T.H. and Powers, E.A., 1976, "The stereotype of old: A review and alternative approach" *Journal of Gerontology*, 31, 441-447.
- 古谷野亘, 2008「サクセスフル・エイジング」古谷野亘・安藤孝敏編『改訂・新社会老年学——シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング, 139-162.
- 内閣府, 2008『平成20年版自殺対策白書』
- 厚生労働省・地域におけるうつ対策検討会, 2004「うつ対応マニュアル——保健医療従事者のために」
www.mhlw.go.jp/shingi/2004/01/dl/s0126-5f.doc
- 本橋豊, 2008「秋田県における高齢者の自殺対策——課題解決に向けた先進的取り組み」(2008年5月23日、東京大学ジェロントロジーセミナー) www.gerontology.jp/home/04/img/0415_02.pdf

障害学と障害者政策

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程
後藤 悠里

本特集では学知と政策との関係がテーマとされている。障害学はこの特集にふさわしい学問分野の一つだといえる。なぜならば、あとで見るように、障害学は障害者政策に大きな影響を与えているからである。

ところで、「障害学 (Disability Studies)」とはいささか聞きなれない言葉である。障害学は長瀬修によって、「障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動」(長瀬 1999:11) と定義されている。日本において頻繁に障害学という言葉が用いられるようになったのは1990年代後半からである。1999年には石川准・長瀬修編著『障害学への招待——社会、文化、ディスアビリティ』が出版され、日本における障害学の本格的な幕開けを告げた。その後、2003年に障害学会が設立され、2004年には静岡県立大学にて第1回障害学会が開かれている。もちろん、それまで日本において障害を論じる学問がなかったわけではなく、長瀬が言うように「「障害学」という軸が意識されてこなかっただけである」(長瀬 1999:29)。日本における障害学はこうした過去の蓄積のもとに、確実に発展を遂げている。

障害学の誕生と障害者政策へのインパクト

障害学は1970年代のイギリスで誕生した。そこでまず、イギリスにおける障害学の歴史